

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第92集

荒木田Ⅱ遺跡発掘調査報告書

広域農道整備事業岩手地区関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

荒木田Ⅱ遺跡発掘調査報告書

広域農道整備事業岩手地区関連遺跡発掘調査

序

本県は遺跡の宝庫といわれるほど、縄文時代文化を中心とする数多くの埋蔵文化財包蔵地を有しております。これら先人達の残した文化財を保護し、保存していくことは我々県民に課せられた重大な責務であります。

一方、現代生活を豊かにし、快適な生活をおくるための地域開発、特に本県の基幹産業である農業の発展計画の推進などは地域住民の切実な願いでもあります。

このように、保護保存と開発という相反する目的を有する事業の調和のとれた行政施策が今日的課題となってきております。

当文化振興事業団は、埋蔵文化財センター創設以来、埋蔵文化財保護の立場にたつて、県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡について発掘調査を行い、その記録を残す方策をとって参りました。

本報告書は、広域農道整備事業に関連して、昭和59年度に行った岩手郡西根町に所在する荒木田Ⅱ遺跡の調査結果をまとめたものであります。

調査範囲は、奥羽山系に連なる小規模な丘陵地の尾根から谷部にかけてで、陥し穴状遺構などの若干の遺構と遺物の発見にとどまりました。

本報告書が広く活用され、研究者のみならず、一般の方々の埋蔵文化財への理解・保護思想普及の一助になれば幸いです。

最後に、これまでの発掘調査や報告書作成に御協力・御援助を賜りました岩手北部土地改良事業所、西根町教育委員会をはじめとする関係各位に感謝申し上げますとともに、今後の御指導、御協力をお願い致します。

昭和60年7月

財団法人 岩手県文化振興事業団

理事長 中 村 直

例 言

1. 本報告書は、岩手県岩手郡西根町荒木田^{あらきだ}地内に所在する荒木田Ⅱ遺跡の発掘調査結果を集録したものである。
2. 本遺跡の発掘調査は、広域農道整備事業岩手地区第8号に伴うものであり、調査は岩手県農政部農地開発課および岩手県北部土地改良事業所と岩手県教育委員会事務局文化課との協議を経て、(財)岩手県埋蔵文化財センターが担当した。
3. 発掘調査の面積および期間は次の通りである。

調査面積	2,500m ²
調査期間	昭和59年8月17日～10月8日
4. 調査担当者は次の2名である。

専門調査員	片方宗明、光井文行
-------	-----------
5. 発掘調査によって検出された遺構は次の通りである。

陥し穴状遺構	1基
溝状遺構	3条
6. 本報告書の執筆分担は次の通りである。

I 調査に至る経過	近藤宗光
II 調査方法と室内整理の方法	片方宗明
III 遺跡の立地と環境	
IV 検出遺構と出土遺物	
V 遺構外出土遺物	1. 石器 片方宗明、2. 土器 光井文行
VI まとめ	光井文行
7. 石質鑑定は次の方に依頼した。(敬称略)

岩手県立大船渡農業高等学校教諭	佐藤二郎
-----------------	------
8. 遺跡地内の基準点測量は、東日本測量KKに依頼し、次のような結果が得られている。

基点1	X = -1779.989 m、Y = 22215.192 m、H = 340.052 m
基点2	X = -1917.482 m、Y = 22241.499 m、H = 315.618 m
9. 本遺跡の発掘調査では、次の機関から御協力を賜った。

西根町役場、西根町教育委員会

10. 現地調査においては、西根町荒木田、帷子、寺田地区の方々、また室内整理は当センターの室内整理作業員の協力を得た。
11. 本遺跡の調査によって得られた一切の資料は岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

序	3. 基本層序	8
例言	4. 周辺の遺跡	9
I. 調査に至る経過	IV. 検出遺構と出土遺物	14
II. 調査の方法と室内整理の方法	1. 陥し穴状遺構	14
1. 野外調査	2. 溝状遺構	14
2. 室内整理	V. 遺構外出土遺物	14
III. 遺跡の立地と環境	1. 石器	14
1. 立地	2. 土器	17
2. 地形	VI. まとめ	18

図版目次

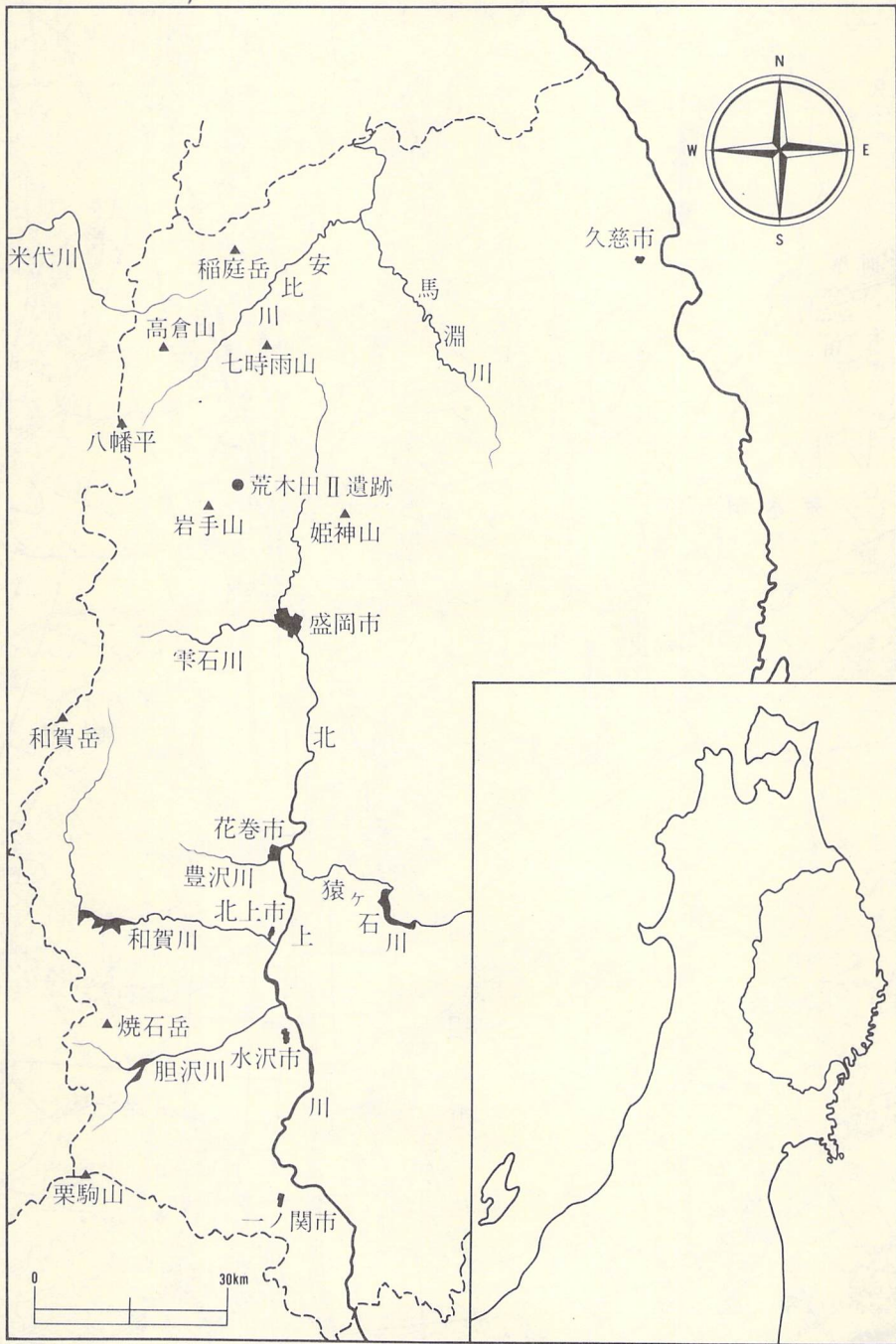
第1図 岩手県全図	1	(G I—101陥し穴状遺構)	
第2図 遺跡位置図	2	(H I—151溝状遺構)	
第3図 遺跡グリッド配置図	5	第9図 遺構実測図	16
第4図 遺跡周辺の地形分類	7	(H I—152溝状遺構)	
第5図 土層柱状図	9	(H II—151溝状遺構)	
第6図 荒木田II遺跡周辺の遺跡分布図	10	第10図 出土遺物(土器)	19
第7図 遺構配置図	13	第11図 出土遺物(土器)	20
第8図 遺構実測図	15	第12図 出土遺物(土器・石器)	21

表目次

表1 荒木田II遺跡周辺の遺跡一覧表	12	表2 石器計測表	22
--------------------	----	----------	----

写真図版目次

写真図版1 遺跡遠景、土層断面	23	写真図版5 H II—151溝状遺構	27
写真図版2 G I—101陥し穴状遺構	24	写真図版6 出土遺物(土器)	28
写真図版3 H I—151溝状遺構	25	写真図版7 出土遺物(土器)	29
写真図版4 H I—152溝状遺構	26	写真図版8 出土遺物(土器、石器)	30



第1図 岩手県全体図



第2図 遺跡位置図

I. 調査に至る経過

岩手町、西根町、松尾村を結ぶ県営岩手地区広域農道整備事業にかかわる埋蔵文化財包蔵地の取扱いについての協議は、昭和54年度から県教育委員会事務局文化課と県農政部農地開発課との間で開始された。

昭和55年6月には、文化課が事業計画ルートに沿って遺跡の分布調査を行い、岩手町25遺跡、西根町14遺跡、松尾村4遺跡の計41遺跡が確認された。この結果をもとに遺跡立地と路線ルートのかかわりや工事工法の変更を含めて両者間で協議が重ねられ、止むを得ず工事によって破壊されたり、遺跡の現況を大きく変える遺跡について事前の発掘調査を行うこととし、発掘調査実施遺跡のリストアップをした。これをもとに工事着工年度にあわせて計画的に発掘調査を行うこととなった。

昭和57年には、当埋蔵文化財センターに西根町上斗内Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡の発掘調査が委託され、昭和58年には岩手町黄金堂遺跡の発掘調査が委託され、それぞれ調査が終了した。

昭和59年には、西根町荒木田Ⅱ遺跡の発掘調査が委託されて調査することとなった。

II. 調査の方法と室内整理の方法

1. 野外調査

(1) 調査区の設定と遺構の呼称

調査区域は、広域農道建設予定地内を範囲とするため、調査区の設定にあたっては、農道建設に伴って設置された路線の中心杭を利用した。調査区の設定は、遺跡内の中心杭 No.217 を基点1 ($X = -1779.989\text{m}$ 、 $Y = 22215.192\text{m}$ 、 $H = 340.052\text{m}$)、中心杭 No.224 を基点2 ($X = -1917.482\text{m}$ 、 $Y = 22241.499\text{m}$ 、 $H = 315.618\text{m}$) とし、この2点間を直線で結びこれを中軸線とした。また中心杭 No.222 を原点とした。

次に中軸線を基線として、2m間隔の平行又は直交する直線を設定し、全面を区画した。従って調査区最小単位は2m×2mとなる。中軸線に平行する区画線に北から20m毎にA～Jを、その内部に更に2m毎に各a～jを付し、中軸線に直交する区画線に対しては西から20m毎にⅠ(2m毎に0～9)、Ⅱ(2m毎に0～9)を付し、グリッド名はこれを組み合わせてAⅠa0、AⅡb1のように呼称した。なお基点1はB a—Ⅱ0の交点、基点2はⅠa—Ⅱ0の交点、原点はGa—Ⅱ0の交点にあたる。

検出された遺構には、大地区名毎に陥し穴状遺構は101～、溝状遺構は151～の番号を付し、大地区名との組み合わせにより、例えばAⅠ—101陥し穴状遺構、BⅡ—151溝状遺構のように

呼称した。

(2) 粗掘りと遺構検出

調査対象区は、面積約 2,500㎡ で大きく分けると丘陵尾根部、南面中腹部の急斜面部、丘陵裾部の緩斜面部になる。現状が牧草地である緩斜面部 (1,549㎡) の粗掘りは人力で行い、雑木林の尾根部、中腹部は重機を利用し遺構検出をした。その結果、尾根部と中腹部では遺構は検出されず、縄文土器片が数片出土したのみである。

緩斜面の粗掘り方法は、まず調査区域境界線及び中軸線の数箇所試掘を行い、地山までの黒色土の層位、層厚の確認を行った。その結果、全体に黒色土がかなり厚いこと、中央部付近で盛り土が見られること、にぶい黄橙色シルト層 (十和田 a 降下火山灰層) の含有などがわかった。トレンチは、南側 → 北側 → 中央部の順に入れ、順次層位を確認しながら掘り下げた。

遺構検出面は、基本層序第Ⅱ層 (にぶい黄橙色シルト層) であり、中央部の東西調査区境界線にかかる形で平安時代の溝状遺構が 2 条、そのすぐ北側で 1 条が検出された。表面採集される遺物は全くなく、遺物包含層は基本層序第Ⅲ層 (黒褐色粘土質シルト) であるが、Ⅲ層からは遺構が検出されなかった。なお、縄文時代の陥し穴状遺構は、地山まで掘り下げていく中で基本層序第Ⅵ層上面で 1 基検出された。

(3) 遺構精査

溝状遺構は、2 分法又は 4 分法、陥し穴状遺構は 2 分法で精査した。

(4) 記録

遺構の実測図は、平面図、断面図ともに縮尺 1/20 で作成した。平面図の実測は、地面にグリッド軸に沿った 1 m × 1 m の水系を張り行った。

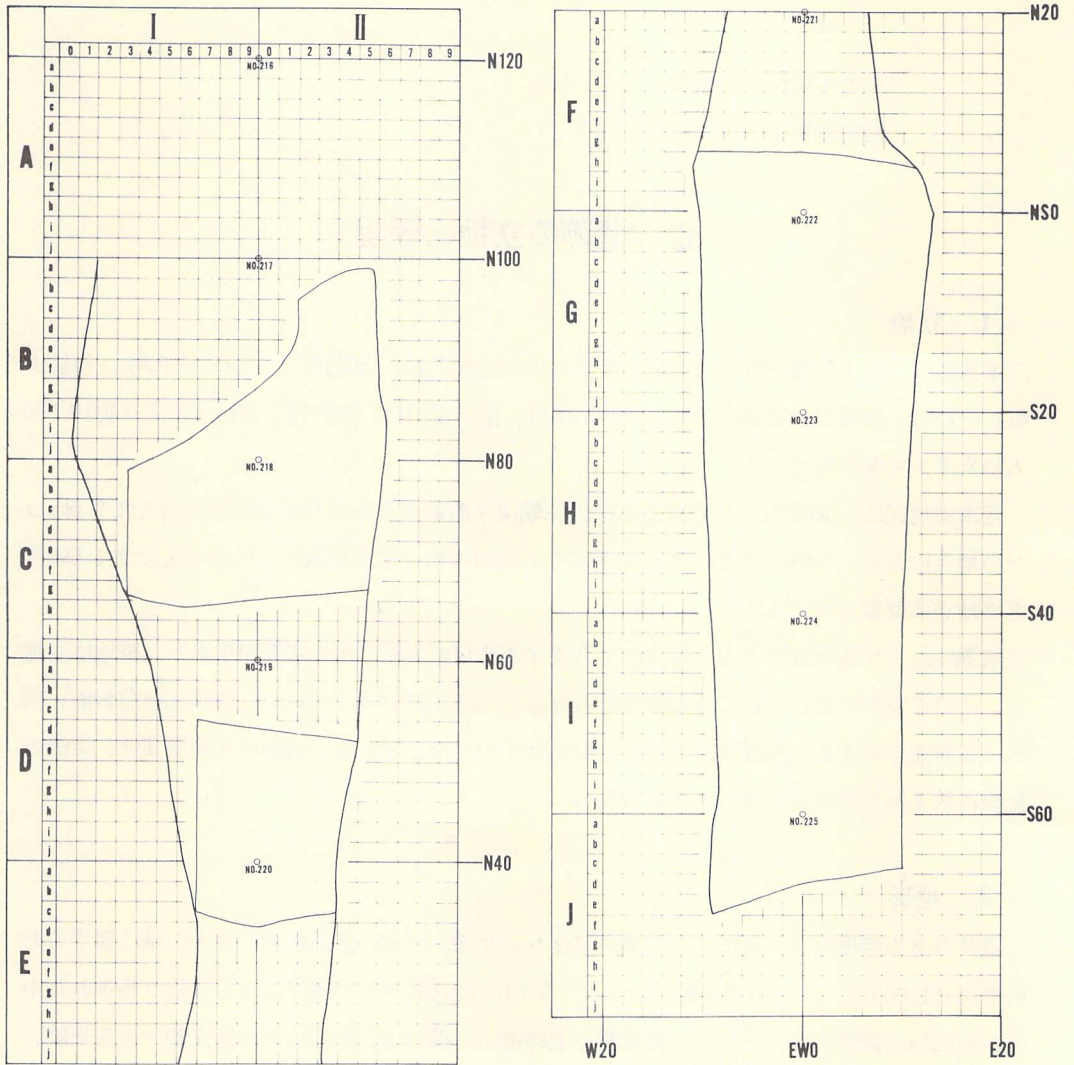
土層の区分名は、基本層序はローマ数字で上位から I、II …… とし、細分される場合はローマ字で a、b …… を付し、Ia、IIa のようにした。遺構内の埋土は、アラビア数字で上位から 1、2 …… とした。なお、土層の色調は「新版標準土色帖」(農林水産省農林水産技術会議事務局監修) によった。

写真撮影は、6 cm × 7 cm (モノクロ)、35mm 版 (モノクロ、カラーリバーサル) の 3 種を使用した。

2. 室内整理

遺構図版は野外調査で作成した遺構実測図をトレースし、縮少して掲載している。縮尺率は、原則として 1/40 としたが縮尺率が不定のものにはスケールを付した。

本報告書中で図示した遺物は、原則として次の縮尺で掲載した。



第3図 グリッド配置図

土器実測図、拓影図……………1/2

石器実測図……………2/3、1/2

Ⅲ．遺跡の立地と環境

1．立地

本遺跡は、岩手郡西根町荒木田第16地割の19に位置する。西根町は、北が安代町、浄法寺町、一戸町と隣接し、東が岩手町、西が松尾村、南が玉山村、滝沢村と隣接する人口約19,000人の岩手山東麓の町である。

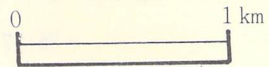
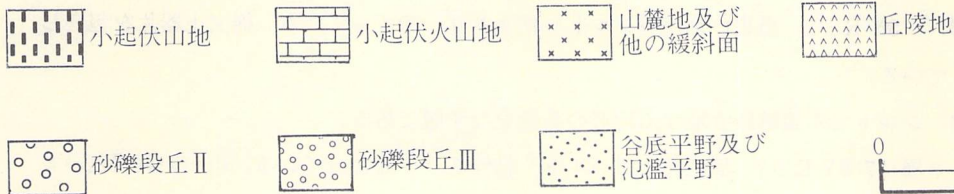
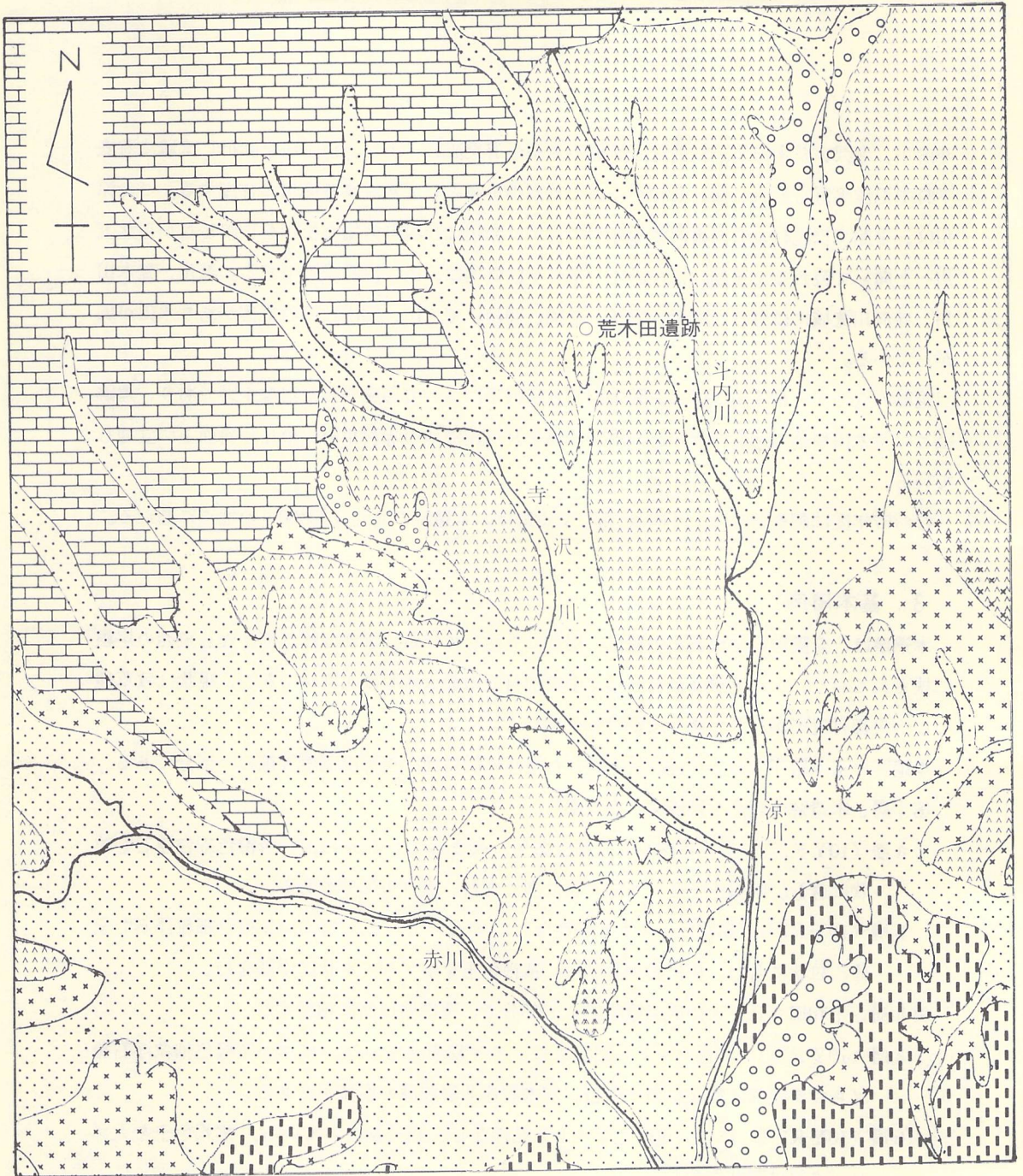
荒木田地区は、西根町中央部にある国鉄花輪線平館駅から赤川及び丘陵地を隔て北2.5kmほどの地点にあり、本遺跡はその荒木田地区中心部の寺田小学校荒木田分校から更に北1.5kmほどの地点に位置している。

遺跡は、平館付近で赤川と南流して合流する涼川の支流である寺沢川東岸の丘陵地に立地し、その丘陵の尾根から裾に至る部分を占める。標高は315m～340mで、中腹部は急斜面、裾部は緩斜面を呈する。尾根部の寺沢川との比高は30mほどである。遺跡の丘陵裾部は、東西の尾根に挟まれた埋没谷であると考えられる。

2．地形

遺跡のある西根町は、東に北上山系が連なり、北部、西部、南部を東日本火山帯に属する七時雨山(1,060m)、八幡平(1,614m)、岩手山(2,041m)の連峰によって取り巻かれた中央部の凹地に位置する。そして、低高度の七時雨山、御月山、前森山の山麓丘陵と土川丘陵、北上川及びその支流の松川、赤川、一方井川沿いの段丘と氾濫原(谷底平野)、また丘陵間や段丘上に残丘的に残る送仙山(472.4m)、白屋山(428.2m)、丹谷山(392.0m)、野駄森(397.3m)等の小起伏山地の孤立山体より構成されている。よく発達した段丘は、台地を形成し多くの集落をのせている。なお、特徴的な地形として、松川中流の上寄木から大更にかけての台地に泥流及び泥流丘が広く見られる。

遺跡周辺の地形を見ると、北には、奥羽山脈に属する火山性の七時雨山山地と御月山山地がある。七時雨山山地は、七時雨山、田代山(954m)、毛無森(904m)、西岳(1,018m)を中心としており、その火山の裾野は周辺へと長く広がり、七時雨山山麓丘陵を形成し遺跡の東部まで迫る。御月山山地は、御月山(954.4m)、荒木田山(807.5m)、上の山(586.4m)、高森山(539.3m)、子飼沢山(509.7m)、薬師森(447.1m)などからなり遺跡付近まで伸びる。遺跡は、この山地から続く御月山山麓丘陵にのっている。そして山地からは、暮坪川、



(土地分類基本調査図「沼宮内」より)

第4図 遺跡周辺の地形分類図

斗内川、寺沢、荒木田川、桜沢など周辺の水系が南東流し、山地、丘陵地を開析し流域に谷底平野や氾濫平野を形成しながらやがて、七時雨山を源として南流する涼川に合流する。この涼川は、平館で松尾村より南東流する赤川に注ぎ、赤川は西根町南端で松川を吸収しながら北上川へと向って流れる。平館、涼川沿い一帯の平館低地は、広い氾濫平野である。涼川、荒木田川、寺沢川流域には野口、寺田、帷子、上関、間館、荒木田、福田などの集落があり水田が広がっている。

遺跡の立地する荒木田地区は、荒木田川と寺沢川によって形成された氾濫平野であり、遺跡はこの荒木田集落の北、寺沢川と斗内川に挟まれた丘陵地の寺沢川沿いの丘陵斜面上に立地している。

なお57年度に調査された上斗内Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ遺跡は、本遺跡の北北東約600mの地点にあたる。

3. 基本層序

本遺跡は、丘陵地の尾根部、中腹部、裾部に立地している。裾部は緩斜面をなし東西の尾根に挟まれており、シルト層はかなり厚く中央部付近の最大層厚は136cmである。現状は牧草地で、中央部付近でかなりの盛り土が行われている。

本遺跡の基本層序であるが、観察、記録した地点は緩斜面中央部西側境界線の一部である。

第Ⅰ層、本遺跡の表土を形成する層である。

a層(10Y R3/2 黒褐色シルト)粘性あり、締まっている。にぶい黄橙色細粒浮石を粒状に含む。暗褐色土をブロック状に多く含む。盛り土部分である。

b層(10Y R3/1 黒褐色シルト)粘性なし、締まっている。にぶい黄橙色細粒浮石を全体に粒状に含む。炭化物少量含む。黄褐色土を小ブロック状に少量含む。

第Ⅱ層、十和田a降下火山灰が観察される部分で、遺構検出面に相当する。

a層(10Y R2/1 黒色シルト)粘性なし、やや締まっている。にぶい黄橙色細粒浮石をブロック状又は粒状に多く含む。基本層序Ⅱ層起源の腐植土である。

b層(10Y R7/2 にぶい黄橙色シルト)粘性なし、堅く締まっている。黒褐色土を大ブロック又は帯状に含む。

第Ⅲ層(7.5Y R2/2 黒褐色粘土質シルト)粘性あり、締まっている。縄文土器片を包含している。

第Ⅳ層 シルトで本遺跡の立地する地形の基盤をなす層である。

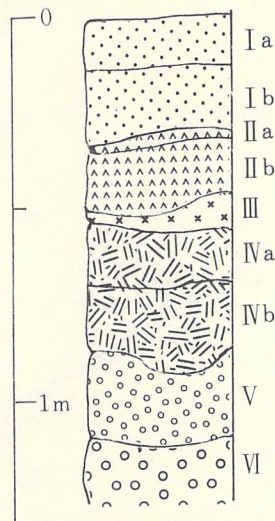
a層(7.5Y R2/1 黒色粘土質シルト)粘性あり、締まっている。細かい黄褐色パミスを含む。

b層(10Y R2/1 黒色粘土質シルト)粘性あり、締まっている。暗褐色土を小ブ

ック状に少量含む。a層より堅い。細かい黄褐色パミスを全体に含む。

第V層（7.5Y R3/1 黒褐色粘土質シルト）粘性あり、堅く締まっている。細かい黄褐色、灰白色パミスを全体に含む。

第VI層（10Y R4/3 にぶい黄褐色粘土）粘性あり、締まっている。細かい灰白色パミス、褐色土を含む。



第5図 土層柱状図

4. 周辺の遺跡

町内の遺跡数に関しては、時代別、性格別に次のように分類されている。（上斗内Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡発掘調査報告書・当センター発行）

集落、遺物散布地				城館跡 (12) 屋敷跡	寺院跡	古墳	墓と塚	一里塚 道標	渡し場	合計
縄文	弥生	古代	不明							
53	2	68	7	13	2	1	4	4	2	156



第6図 荒木田Ⅱ遺跡周辺の遺跡分布図

これによれば、町の全遺跡数の83%を集落、遺物散布地が占め、時代別区分では、縄文時代と古代が大半を占め、そのなかで、やや古代の遺跡数が上まわっている。

また、県教育委員会文化課資料によれば、町北部にあたる赤川流域以北の遺跡数は約60を数え、そのうち荒木田地区は51%、寺田地区は27%をしめ、本遺跡（周辺の遺跡分布図の27）の周辺には遺跡が多い。それを時代別、性格別で見ると重複部分はあるが、縄文時代の遺跡32、古代遺跡18、館跡8、屋敷跡、祭祀跡、櫓跡、一里塚、墳墓各1となり町全体の場合とは異なり、縄文時代の遺跡の方が多くなっている。特に遺跡が密集しているのは斗内川上流、寺沢川上流、荒木田川、桜沢など涼川の支流沿いで、川筋に面した低丘陵地の頂上部や裾部に遺跡が立地している。

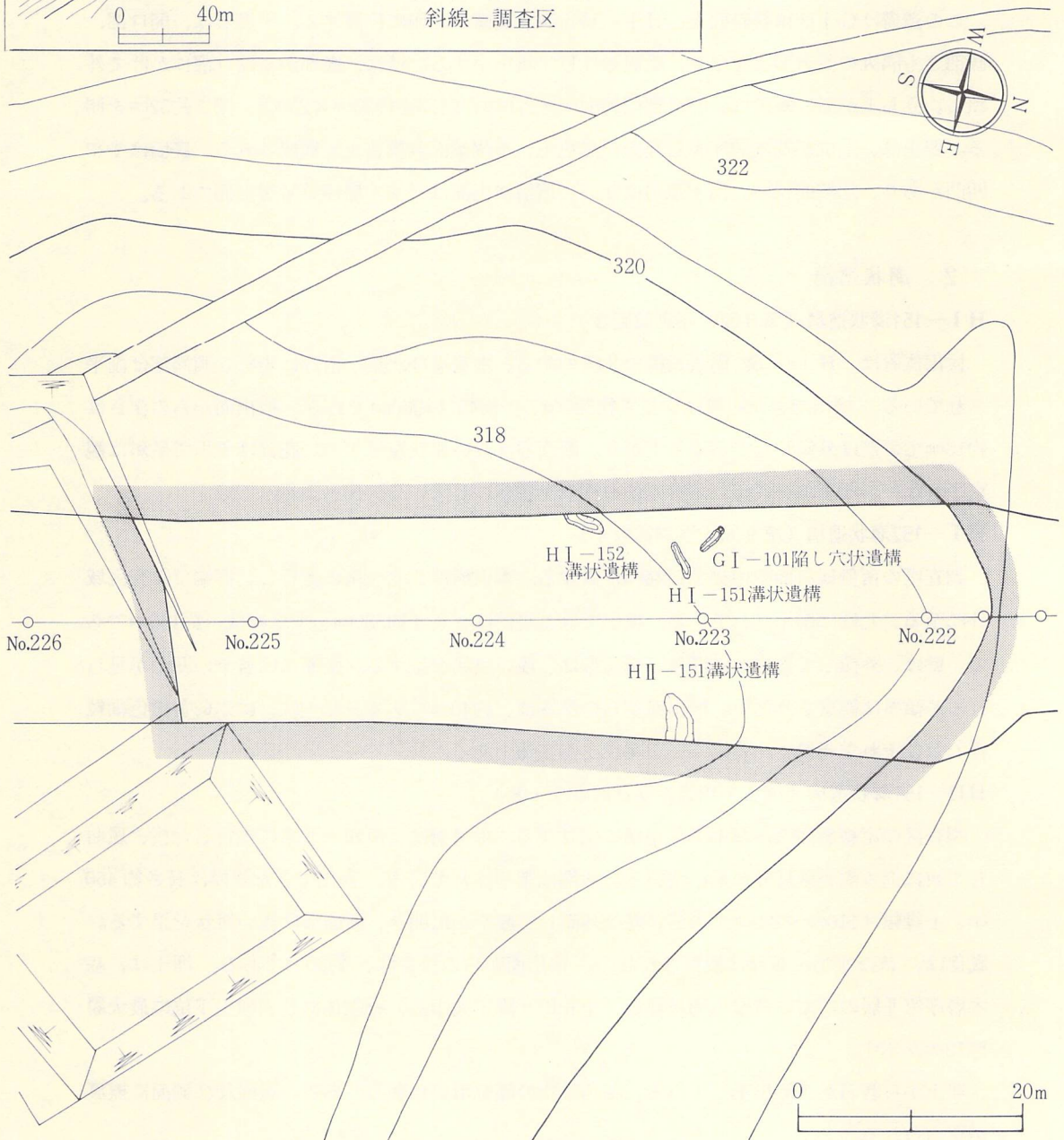
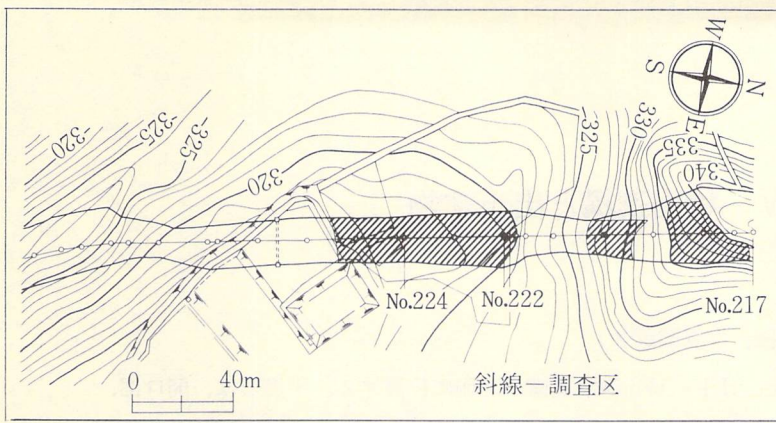
本遺跡に隣接する岩手町の西部には、県指定史跡の竪穴住居跡と古墳群がある。住居跡は、西根町寺田T字路より南東約4.5kmの今松竪穴住居跡と、更に東2.7kmの仙波堤竪穴住居跡である。多数の住居跡、土師器、土製勾玉、鉄製品等が出土し、平安時代初期の開拓期における鉄器の利用と稲作を物語る重要な史跡である。また、今松竪穴住居跡から南2.3kmの地点には県史跡の浮島古墳群がある。これは、大正13年に小田島祿郎氏が、14基の円墳を調査し、奈良時代末期から平安時代初期のものとして推定している。なお、この後氏は本遺跡に近い荒木田の九ツ森を調査し、上記との関連の中で九ツ森古墳群と命名し、現在は墳墓として登録されている。

参考・引用文献

- 高橋与右エ門・大原一則 1984年 『上斗内Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡発掘調査報告書』 岩手県埋蔵文化財センター
岩手県高等学校社会科学研究会日本史部会 1975年 『岩手県の歴史散歩』 山川出版社
岩手県教育委員会 1982年 『岩手県遺跡基本図 西根町』
国土地理協会 1984年 『全国遺跡地図 岩手県』 文化庁文化財保護部
岩手県 1975年 『北上山系開発地域 土地分類基本調査 沼宮内』 岩手県企画開発室

表1 荒木田Ⅱ遺跡周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	番号	遺跡名	種別
1	子飼沢山高地集落	集落跡	43	上関館	散布地
2	滝ノ沢	散布地	44	上関館跡	館跡
3	小曲沢Ⅱ	散布地	45	春宮田	散布地
4	小曲沢Ⅰ	散布地	46	春赤寺	館跡
5	長渡沢	散布地	47	時時森Ⅰ	散布地
6	間館Ⅱ	集落跡	48	時時森Ⅱ	散布地
7	寺沢Ⅳ	散布地	49	時時森Ⅲ	散布地
8	寺沢Ⅶ	散布地	50	時落	散布地
9	寺沢Ⅰ	集落跡	51	時落	散布地
10	寺沢Ⅵ	散布地	52	山崎野館	散布地
11	寺沢Ⅱ	集落跡	53	山崎野館	集落跡
12	寺沢Ⅲ	散布地	54	山崎野館	館跡
13	寺沢Ⅴ	散布地	55	山崎一里塚	一里塚
14	上斗内Ⅳ	散布地	56	稲荷山館	館跡
15	上斗内Ⅴ	散布地	57	堀切えぞ館	館跡
16	上斗内Ⅰ	散布地	58	堀切えぞ館	館跡
17	上斗内Ⅲ	散布地	59	川原目向	散布地
18	上斗内Ⅱ	散布地	60	稲寺田	散布地
19	寺田暮坪	散布地	61	寺田	館跡
20	野口Ⅰ	散布地	62	佐々木	館跡
21	野口Ⅱ	散布地	63	北田	館跡
22	蒼野口前	散布地	64	田	散布地
23	野口Ⅳ	散布地	65	笹野	散布地
24	野口Ⅲ	散布地	66	野	散布地
25	間館Ⅰ	集落跡	67	野田	館跡
26	治左衛門屋敷	屋敷跡	68	館	散布地
27	荒木田Ⅱ	散布地	69	館	散布地
28	野口五輪塔	祭祀跡	70	平	館跡
29	桜沢Ⅰ	散布地	71	中間	散布地
30	桜沢Ⅱ	集落地	72	中間	散布地
31	荒木田Ⅲ	散布地	73	大東	集落跡
32	荒木田Ⅳ	散布地	74	大東	集落跡
33	桜沢Ⅲ	散布地	75	東	集落跡
34	九堂ツ	墳墓	76	東	集落跡
35	堂後Ⅱ	散布地	77	落	集落跡
36	荒木田Ⅰ	散布地	78	白	散布地
37	荒木田館	館跡	79	金	散布地
38	荒木田櫓跡	櫓跡	80	森	散布地
39	堂後Ⅲ	散布地	81	合湧	散布地
40	桜堂後Ⅳ	散布地	82	谷田	散布地
41	堂後Ⅰ	散布地	83	北	集落跡
42	福田	集落跡	84	北	散布地



第7図 遺構配置図

Ⅳ．検出遺構と出土遺物

1．陥し穴状遺構

G I—101陥し穴状遺構（第8図、写真図版2）

この遺構はG I区南緩斜面上、H I—151 溝状遺構の北側に位置する。平面形は、開口部、底部とも隅丸の長方形状を呈し、断面形はU字状を呈する。壁は、底部から開口部にかけて外傾し、立ち上がる。規模は、開口部径約64cm×270cm、底部径約30cm×250cm、深さ約52cmを測る。埋土は、上位が基本層序Ⅳ層起源の黒色土、下位が灰黄褐色土で構成される。底面はやや凹凸があり、比較的堅い。出土遺物はない。遺構検出面は、基本層序第Ⅵ層上面である。

2．溝状遺構

H I—151溝状遺構（第8図、写真図版3）

検出位置は、H I—152 溝状遺構の北隣である。本遺構は北東—南西に走行し両端部は削平されている。検出できた規模は、長さ約320cm、上縁幅は約60cmである。検出面からの深さは約15cmで、壁は外傾しながら立ち上がり、断面形は浅い皿状を呈する。底部は平坦で傾斜は観察されない。埋土は、にぶい黄橙色細粒浮石を主体にしている。出土遺物はない。

H I—152溝状遺構（第9図、写真図版4）

調査区の南側緩斜面の中央部西端に位置する。本遺構は、北～南に走行し、南端で調査区域外に至る。北端は削平されている。検出できた規模は、長さ約330cm、上縁幅は、約130cmである。壁は、外傾して緩やかに開き、断面形は、浅い皿状を呈する。底面には若干の凹凸が見られるが傾斜は観察されない。検出面からの深さは、約40cmである。埋土は、にぶい黄橙色細粒浮石及びそれを起源とするにぶい黄褐色土が主体である。

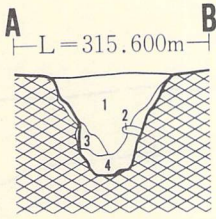
HII—151溝状遺構（第9・12図、写真図版5・8）

調査区の南緩斜面のほぼ中央部東端に位置する。本遺構は、南西—北東に走行した後、屈曲して東に進み調査区域外に延びている。西端は削平されている。検出できた規模は長さ約450cm、上縁幅は110cm～220cmである。壁は外傾して緩やかに開き、断面形は浅い皿状を呈する。底部は、ほぼ平坦で傾斜は観察されない。検出面からの深さは、約30cmである。埋土は、基本層序第Ⅱ層のにぶい黄橙色細粒浮石（十和田a降下火山灰）を主体にし、埋土下位に最大層厚12cmを示す。

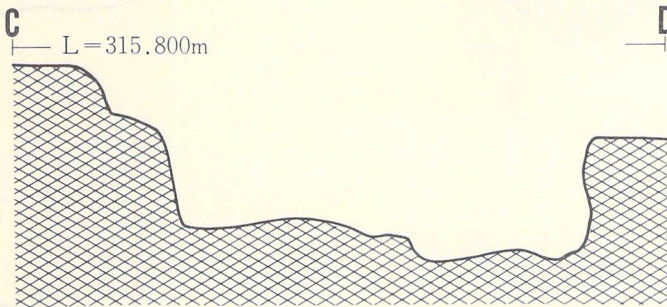
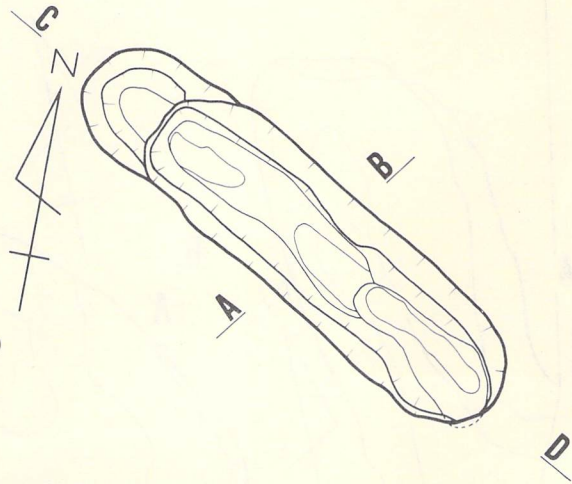
埋土から磨石が1個出土している。四角錐状の礫を用いた磨石である。正面及び側面に擦痕が認められる。

a. G I - 101 陥し穴状遺構

W9
S18



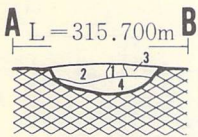
- 1. 7.5YR 2/1 黒色土 (含、黄褐色細粒浮石)
- 2. 7.5YR 1.7/1 黒色土 (含、にぶい黄橙色細粒浮石)
- 3. 7.5YR 5/3 にぶい褐色土 (含、にぶい黄褐色細粒浮石)
- 4. 10YR 4/2 灰黄褐色土 (含、黄褐色浮石)



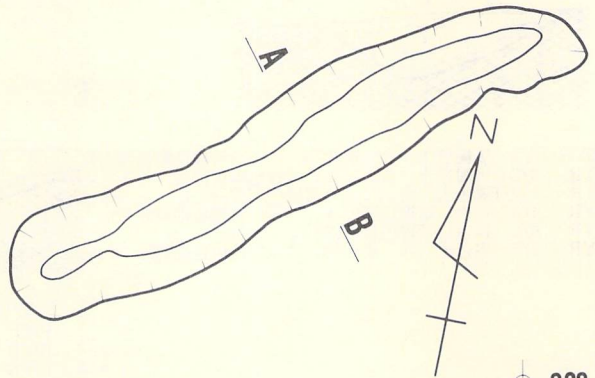
S20
W6

b. H I - 151 溝状遺構

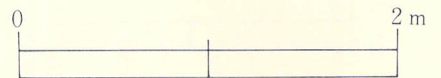
W7
S21



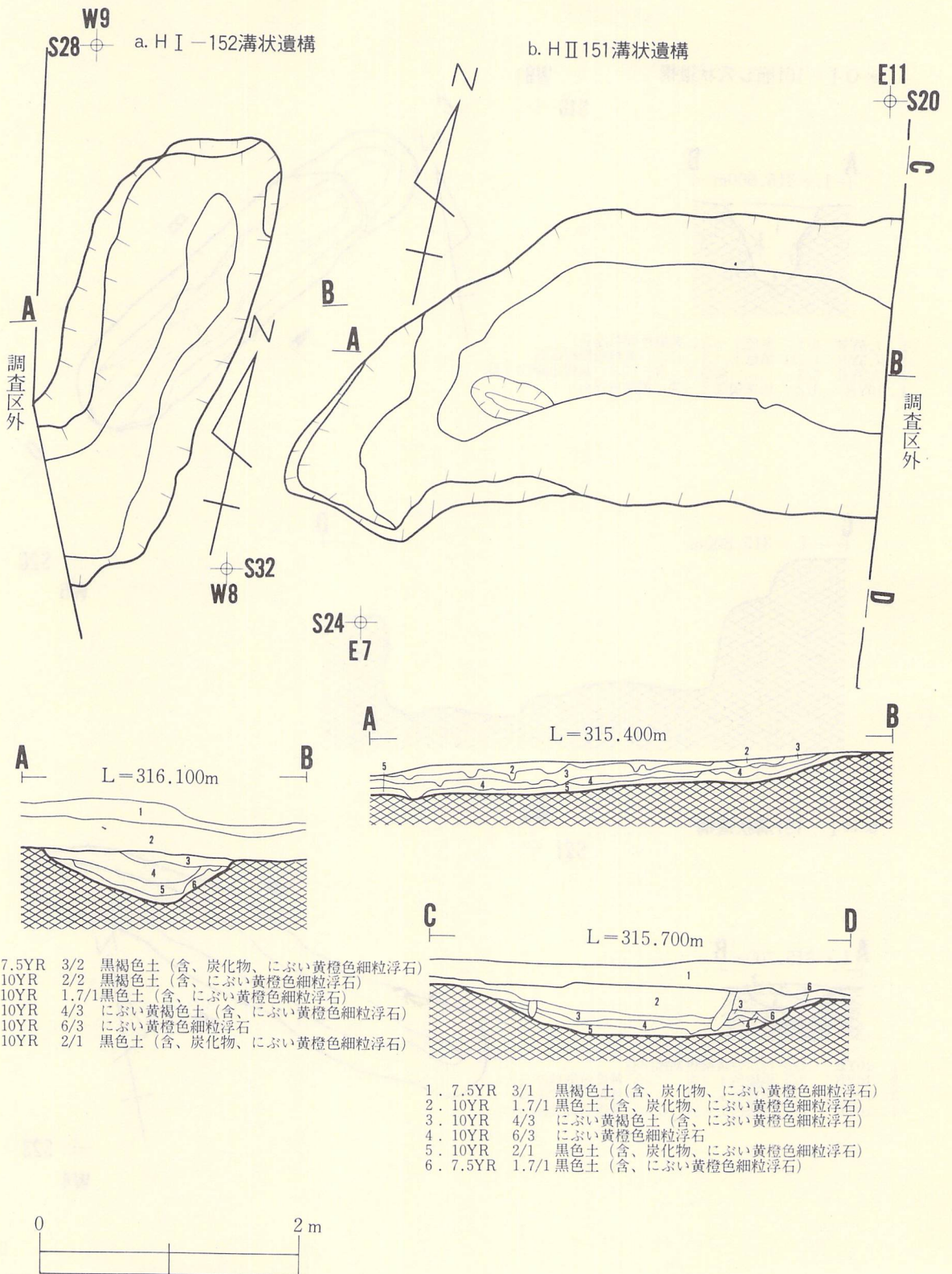
- 1. 10YR 7/3 にぶい黄橙色細粒浮石
- 2. 10YR 2/3 黒褐色土 (含、にぶい黄橙色細粒浮石)
- 3. 7.5YR 3/1 黒褐色土 (含、にぶい黄褐色細粒浮石)
- 4. 10YR 2/2 黒褐色土 (含、にぶい黄褐色細粒浮石)



S23
W4



第 8 図 遺構実測図



1. 7.5YR 3/2 黒褐色土 (含、炭化物、にぶい黄橙色細粒浮石)
2. 10YR 2/2 黒褐色土 (含、にぶい黄橙色細粒浮石)
3. 10YR 1.7/1 黒色土 (含、にぶい黄橙色細粒浮石)
4. 10YR 4/3 にぶい黄褐色土 (含、にぶい黄橙色細粒浮石)
5. 10YR 6/3 にぶい黄橙色細粒浮石
6. 10YR 2/1 黒色土 (含、炭化物、にぶい黄橙色細粒浮石)

1. 7.5YR 3/1 黒褐色土 (含、炭化物、にぶい黄橙色細粒浮石)
2. 10YR 1.7/1 黒色土 (含、炭化物、にぶい黄橙色細粒浮石)
3. 10YR 4/3 にぶい黄褐色土 (含、にぶい黄橙色細粒浮石)
4. 10YR 6/3 にぶい黄橙色細粒浮石
5. 10YR 2/1 黒色土 (含、炭化物、にぶい黄橙色細粒浮石)
6. 7.5YR 1.7/1 黒色土 (含、にぶい黄橙色細粒浮石)

第9図 遺構実測図

V. 遺構外出土遺物

1. 石器

石匙（第12図、写真図版8）

主要刃部がつまみからの主軸線に対して平行な縦形石匙である。つまみは、バルブの位置と反対の方向にある。形状は、つまみに近い部分は角ばり、右側縁が右側にゆるくカーブする。下端部も角ばり右下がりになる。調整は、剥片表面の右側縁と裏面の一部右側縁で見られる。

使用痕のある剥片（第12図、写真図版8）

剥片の新鮮で鋭利な部分をそのまま石器として使用し、その結果連続的な細かい剥離が認められる。

磨石（第12図、写真図版8）

2点出土している。28は楕円形の礫を用いた扁平な磨石で、表面全体に擦痕が認められる。裏面には見られない。29は断面が四角形の柱状礫を用いたものである。尖った方の側縁には敲打痕が認められる。また、表面上部と右側面上半部には擦痕が、稜線部付近には敲打痕が認められる。

2. 土器

出土した土器は破片が大半を占め、口縁部から底部までそろって復元できたものはない。各破片で反転実測できたのは、口縁部片が2点、体部片が2点、底部片が3点である。

調査区を丘陵尾根部、中腹部、緩斜面部に分けて土器出土状況を見ると、中腹部からは出土せず、尾根部からは数片で、大半が緩斜面部から出土している。緩斜面部では西側中央のGⅠ地区と東側中央のGⅡ地区の表土及びⅢ層から集中して検出されている。

出土土器の大半は粗製土器で、精製土器は全体の1割にも満たない。精製土器の破片から推定して、出土している土器は縄文時代後期前葉・末葉、晩期中葉の時期のものが中心であると思われる。

文様のある土器（第10図、写真図版6）

第10図の1・2は沈線で区画し、磨消縄文が施文されている体部片である。地文は単節の斜縄文（LR）である。縄文後期に位置づけられる。3は磨消縄文により入組文が施文されている体部片である。地文は単節の斜縄文（LR）である。縄文後期末葉～晩期初頭に位置づけられるものである。4は半肉彫りの磨消縄文が施されている体部片である。地文は単節の斜縄文（LR）である。縄文晩期中葉のものである。5・6は同一個体のものである。単節の斜縄文（LR）の地文に、沈線が横位に施文されている体部片である。縄文後期または晩期に

属するものと推定される。7は横位に浅い沈線文が施文されている体部片である。地文は単節の斜縄文(LR)である。縄文後期前葉のものである。

撚糸文の土器(第10図、写真図版6)

第10図の8は網目状撚糸文(R)が施文されている体部片である。縄文後期前葉に位置づけられるものと思われる。

縄文の土器(第10~12図、写真図版6~8)

<無節の縄文の土器>

第10図の14・15は無節の縄文(L)が施文されている口縁部片と体部片で、内面が丁寧に研磨されている。

<単節の縄文の土器>

第10図の9~12は単節の斜縄文(RL)が施文されている口縁片で、17は同じ地文の体部片である。12は口唇部近くの内外面に輪積み痕が見られる。第11図の20は単節の斜縄文(RL)が施文されている底部片である。底部外面に木の葉や網代などの圧痕は見られない。

第10図の14は体部片で上半のみに単節の斜縄文(LR)が施文されているものである。表面に炭化物が多く付着している。第11図の18は口縁部がやや内彎しながら立ち上がっている深鉢の口縁部片である。地文は単節の斜縄文(LR)である。19は口縁部が外傾している深鉢の口縁部片である。地文は単節の斜縄文(LR)である。第12図の24は単節の斜縄文(LR)を地文とする体部片である。

第11図の20は器面に単節の斜縄文の(RL)と(LR)の両方が施文されている体部片である。

無文の土器(第11図、写真図版7)

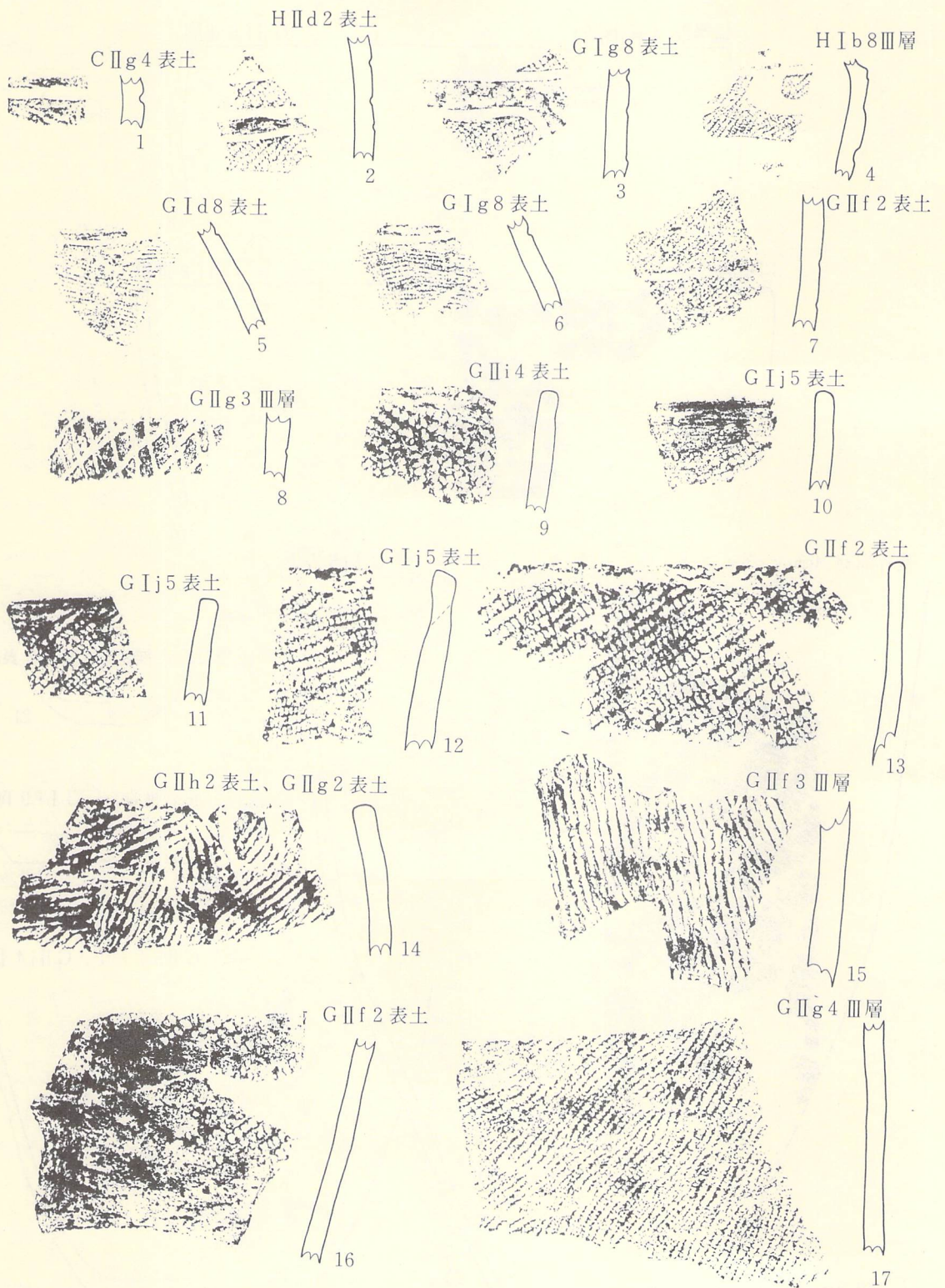
第11図の21は小型の鉢の体部下半から底部にかけてのものである。縄文が施文されていない。底部は中央部が幾分上がっている。

文様、地文不明の土器(第11図、写真図版7)

第11図の22は深鉢の底部であるが外面が剥れていて、文様、地文が不明のものである。底部外面の中央に沈線が1本見られる。

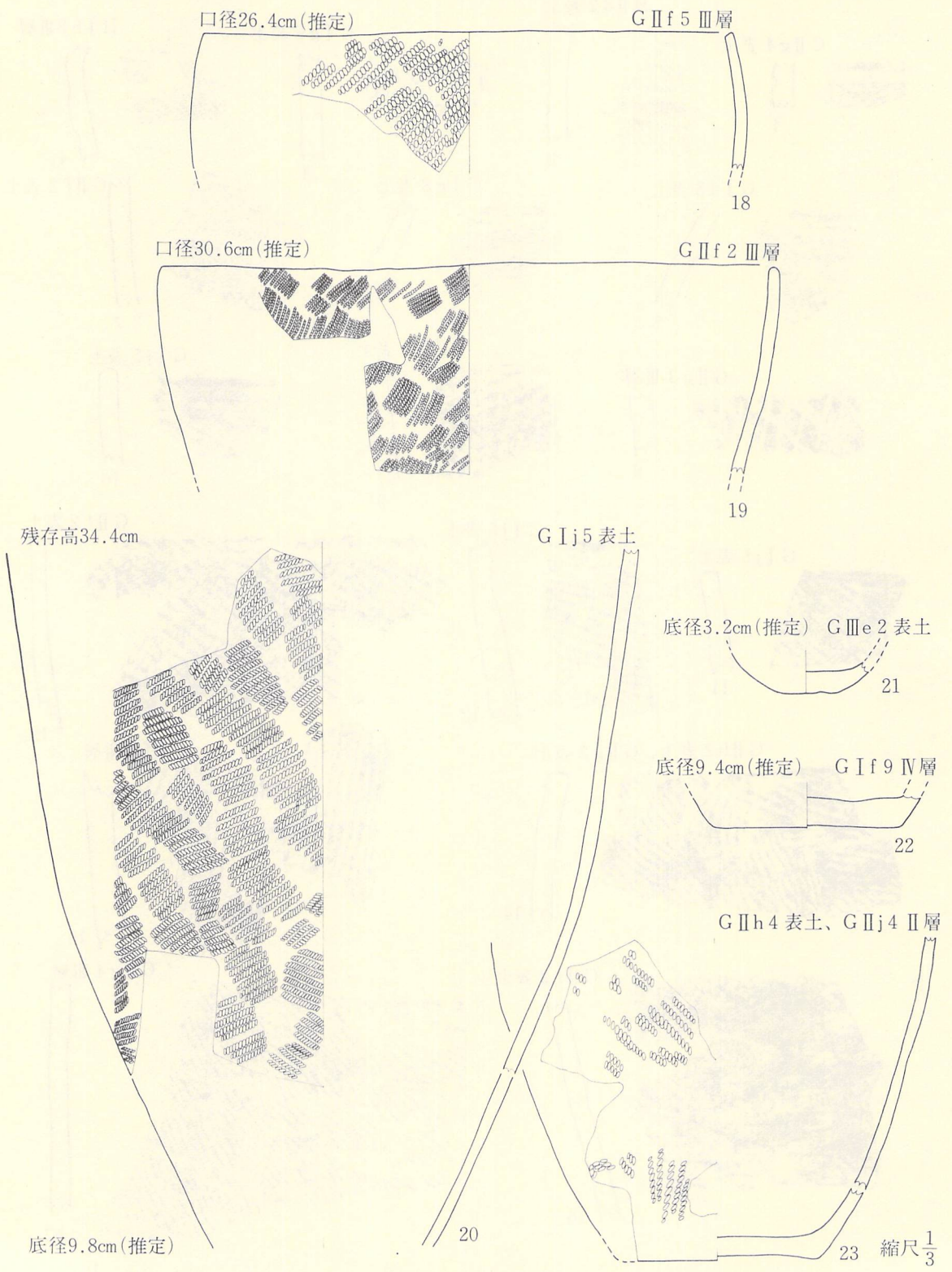
Ⅵ. ま と め

陥し穴状遺構は隣接の岩手町川口Ⅰ遺跡から17基検出されている。報告書では陥し穴を6タイプに分類している。本遺跡から検出された片側に段のある陥し穴状遺構はBタイプに属すると考えられる。このタイプのものは4基検出されており、時期は縄文時代と推定されている。

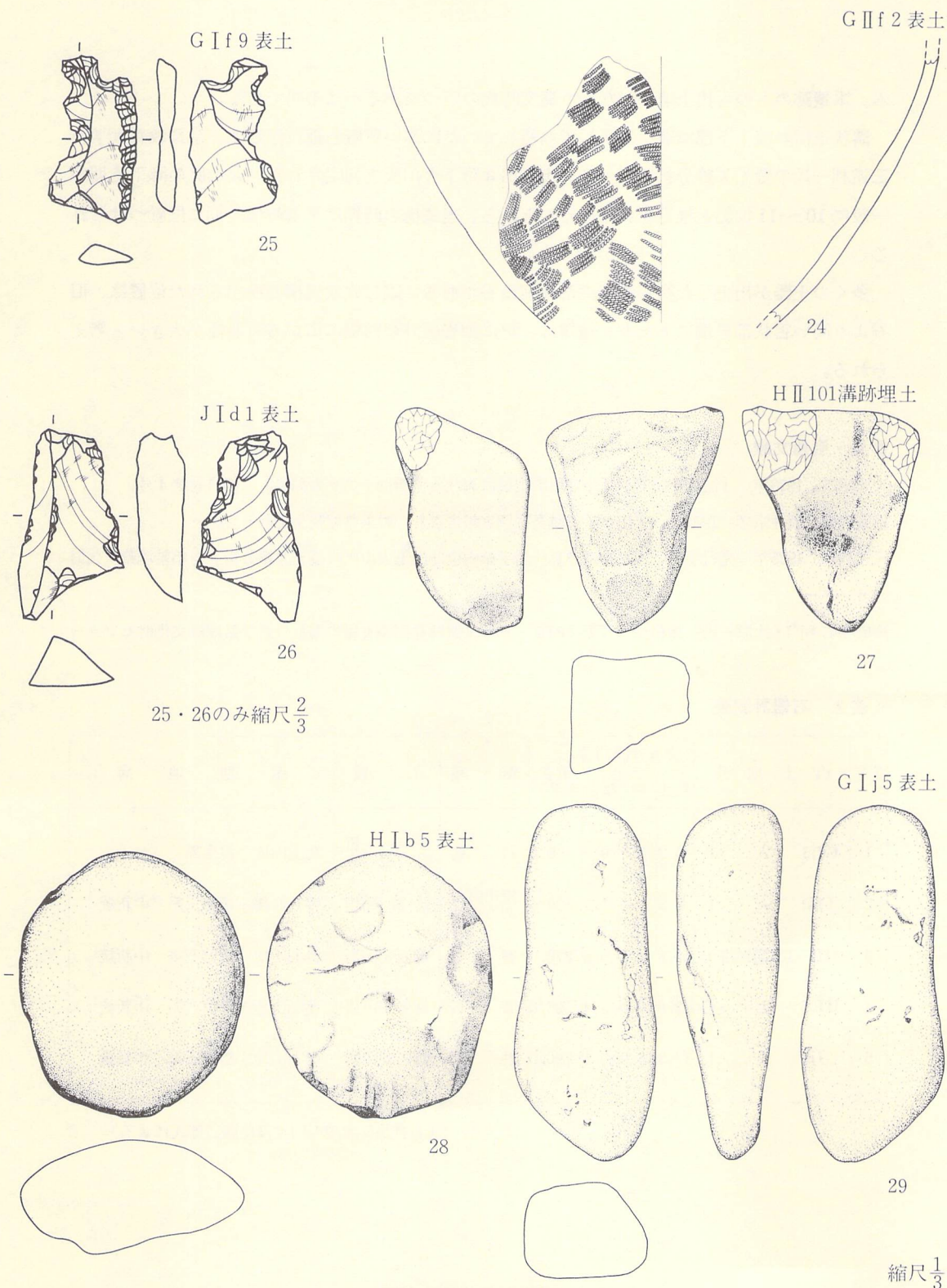


第10図 出土遺物

縮尺 $\frac{1}{2}$



第11図 出土遺物



第12図 出土遺物

る。本遺跡のものも出土遺物がなく、縄文時代のいつであるかは不明である。

溝状遺構の埋土下部に層を形成して堆積していたにぶい黄橙色細粒浮石は、奈良教育大学の三述利一氏の蛍光X線分析によって、十和田a降下火山灰と同定された。火山灰の降下時期が一般に10～11世紀と推定されていることから、当遺構の時期は平安時代後期に位置づけられる。

多くの土器が出土した緩斜面中央部は埋没谷である。陥し穴状遺構の検出された位置は、旧谷より高い舌状部先端にあたり、遺構は、更に調査区外の西側に広がる可能性が大きいと考えられる。

参考・引用文献

- 大池昭二 1973年 『第4紀研究』「十和田山東麓における完新世テフラの編年」 第11巻第4号
 近藤宗光・酒井宗孝 1984年 『川口I遺跡発掘調査報告書』 岩手県埋蔵文化財センター
 三述利一 1985年 発行予定 『水神遺跡』「岩手県内遺跡出土火山灰の蛍光X線分析」岩手県埋蔵文化財センター
 高橋与右エ門・大原一則 1984年 『上斗内Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ遺跡発掘調査報告書』 岩手県埋蔵文化財センター

表2 石器計測表

番号	出土地点	大きさ(cm)			重さ(g)	器種	石質	産地	地層
		長さ	幅	厚さ					
1	GIj5 表土	5.2	2.8	0.7	9.6	石匙	チャート質 粘板岩	北上山地	古生界
2	JId1 表土	6.6	3.5	1.5	29.6	使用痕のある 剥片	珪質泥岩	雫石西部	新第三系 中新統
3	HII-101溝跡埋土	10.8	8.8	5.8	870.0	磨石	輝石安山岩	奥羽山地	新第三系 中新統
4	HIb5 表土	13.0	10.0	5.4	595.0	磨石	輝石安山岩	奥羽山地	新第三系 中新統
5	GIj5 表土	17.3	6.9	5.1	790.0	磨石	輝石安山岩	奥羽山地	新第三系 中新統

(石質及び産地の同定は佐藤二郎氏による)



a. 遺跡遠景

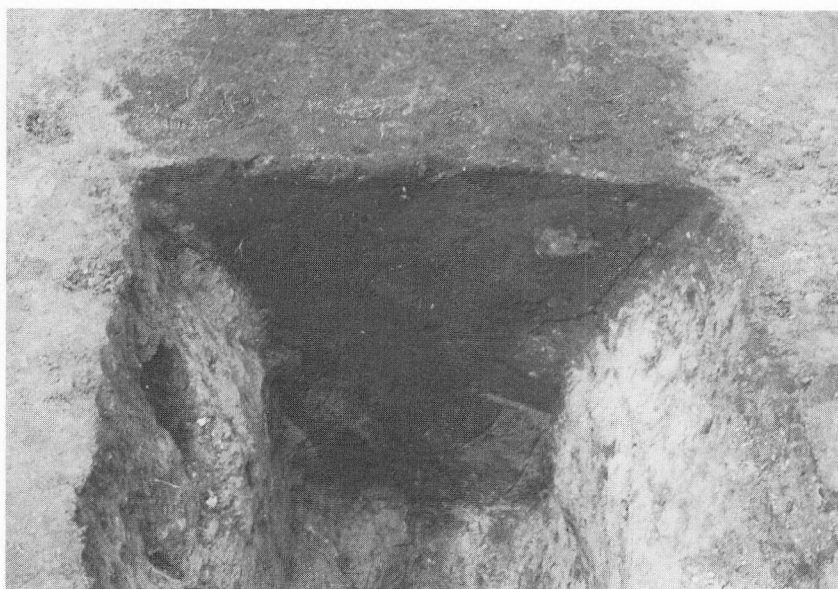


b. 土層断面

写真図版 1

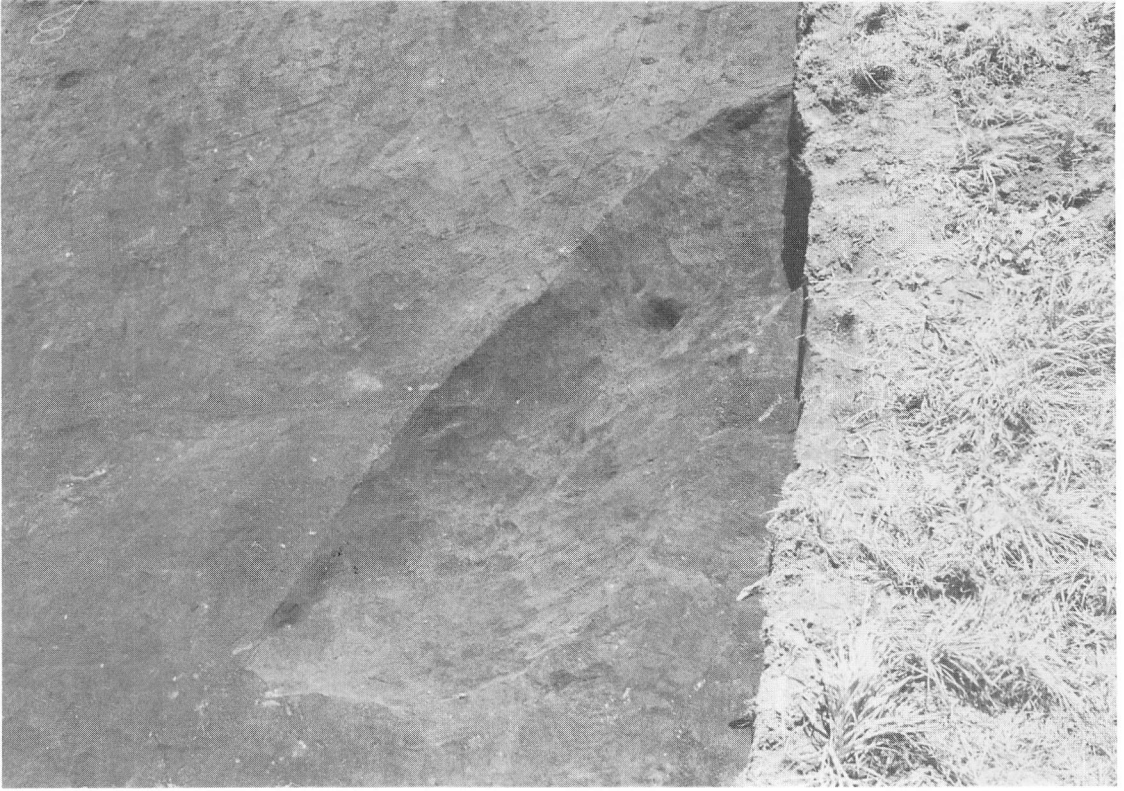


a. GI-101陥し穴状遺構(平面)

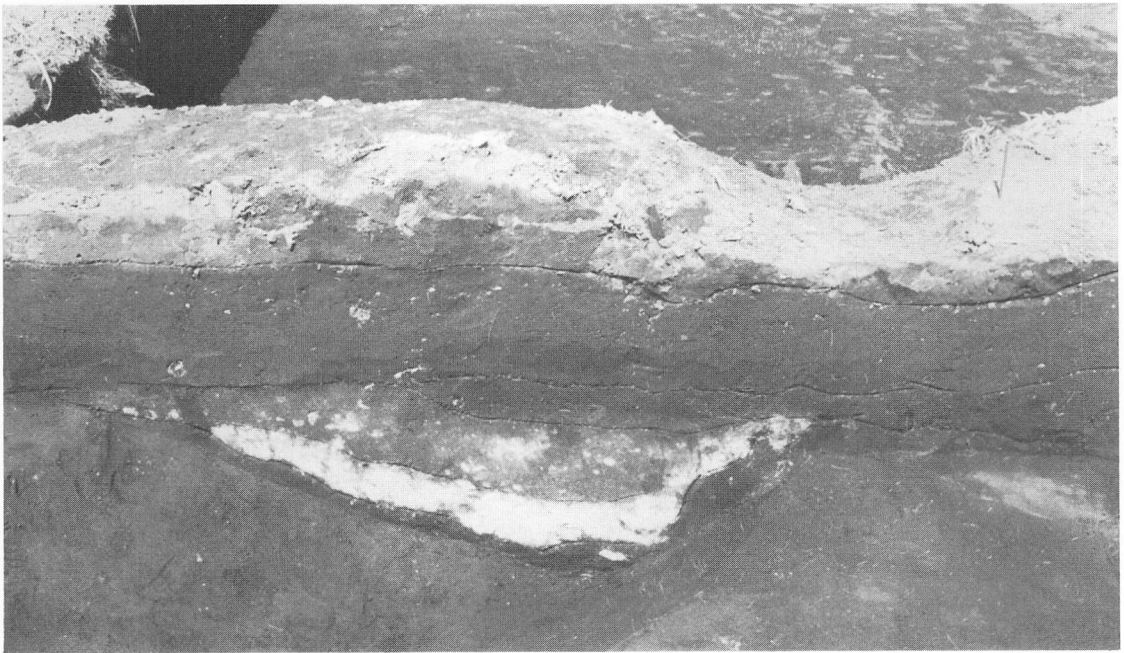


b. GI-101陥し穴状遺構(埋土断面)

写真図版 2



a. HI-151溝状遺構(平面)

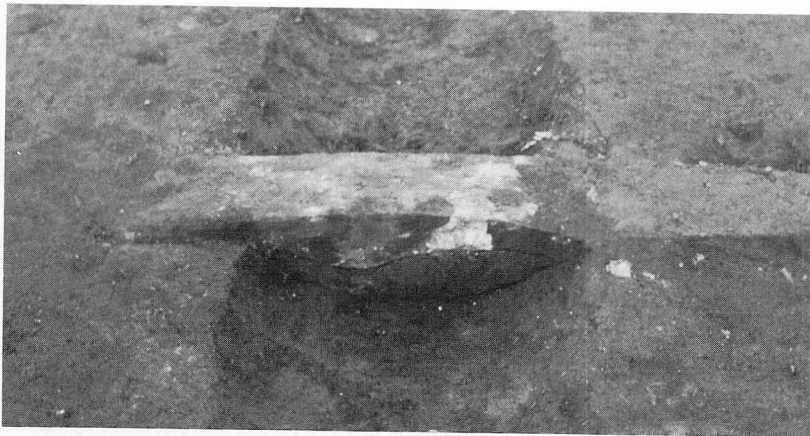


b. HI-151溝状遺構(埋土断面)

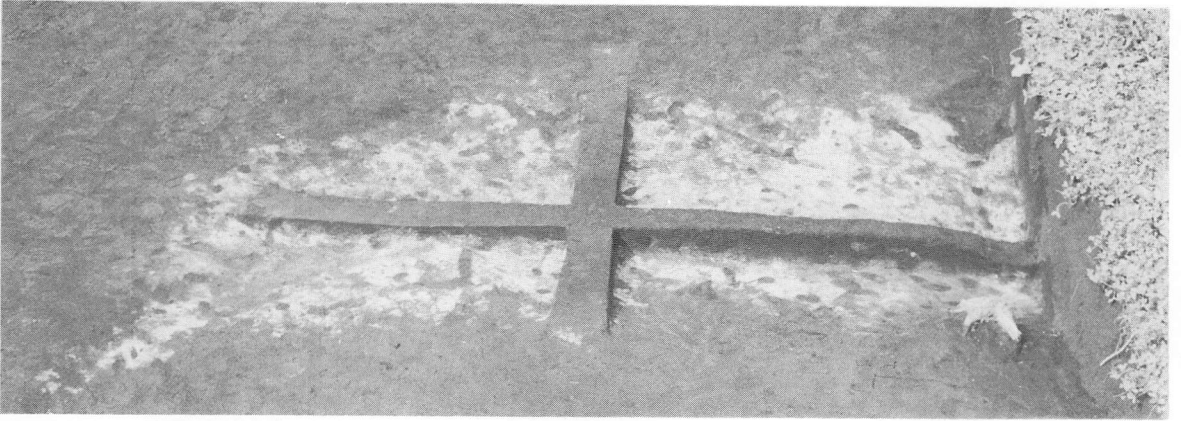
写真図版 3



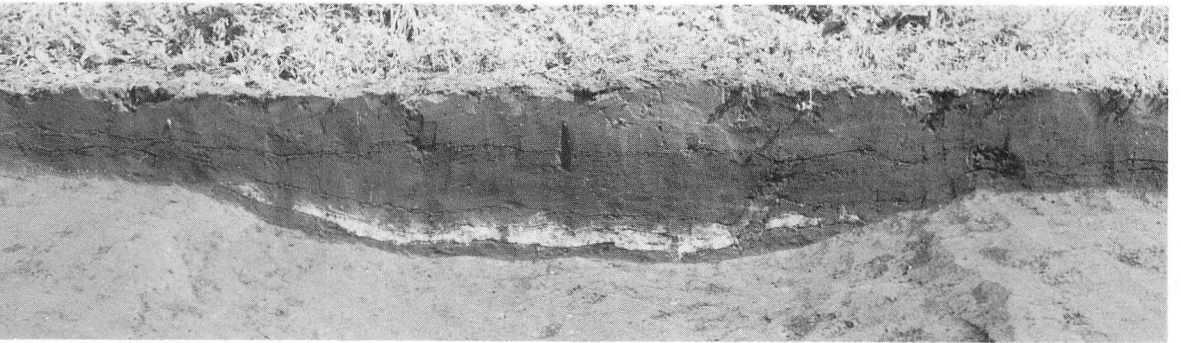
a. H I -152溝状遺構(平面)



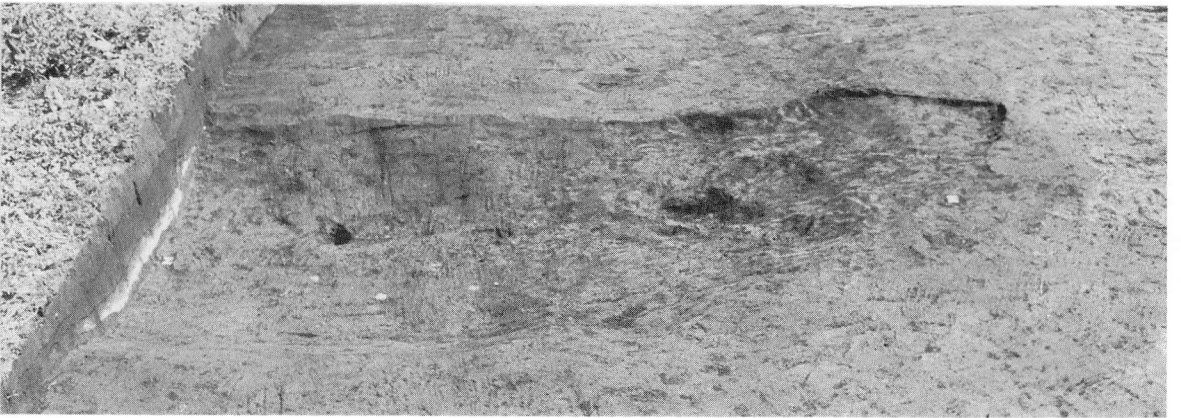
b. H I -152溝状遺構(埋土断面)



a. H II - 151溝状遺構(検出状況)



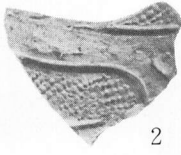
b. H II - 151溝状遺構(埋土断面)



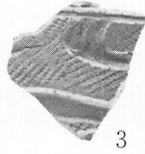
c. H II - 151溝状遺構(平面)



1



2



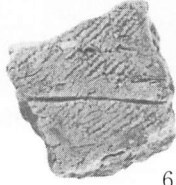
3



4



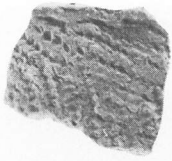
5



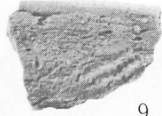
6



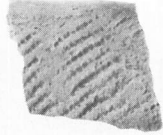
7



8



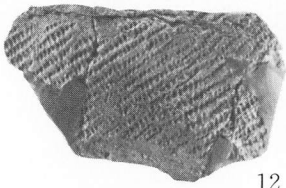
9



10



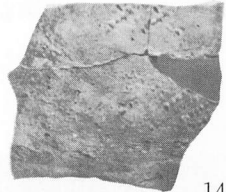
11



12



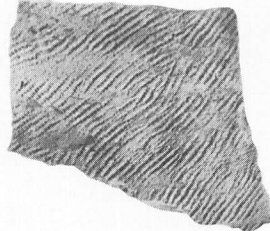
13



14

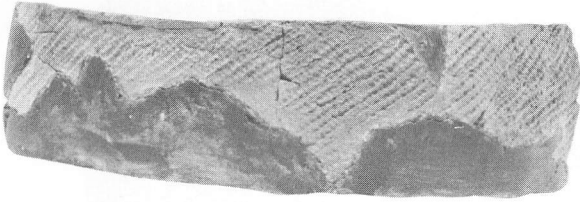


15



16

写真图版 6



17



18



21



19

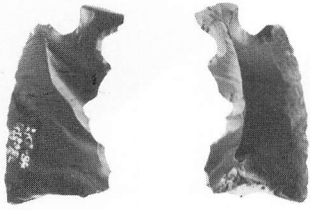


20



22

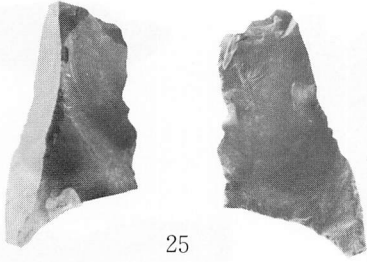
写真図版 7



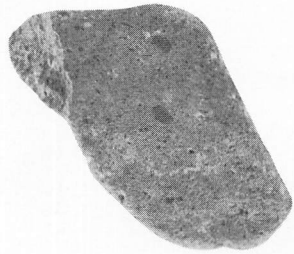
23



24



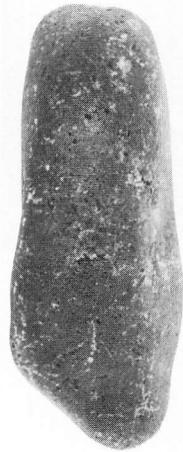
25



26



27



28

写真图版 8

財団法人 岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター 職員

所 長 及川昌二
副 所 長 宮 英 一

〔管 理 課〕

課 長 千葉久夫
課 長 補 佐 阿部 詔 夫
主 事 戸草内 幸 男
" 立 花 多加志
技 能 員 佐 藤 春 男

〔調 査 課〕

課 長	近 藤 宗 光		
主任文化財専門調査員	昆 野 靖		
文化財専門調査員	片 方 宗 明	文化財専門調査員	光 井 文 行
"	長 沼 彬	"	玉 川 英 喜
"	菊 池 利 和	"	石 川 長 喜
"	渡 辺 洋 一	"	三 浦 謙 一
"	佐々木 嘉 直	"	工 藤 利 幸
"	平 井 進	"	中 川 重 紀
"	中 村 良 一	"	高 橋 与右エ門
"	田 村 壯 一	"	高 橋 義 介
"	岩 渕 久	"	酒 井 宗 孝

〔資 料 課〕

課 長 名須川 溢 男
文化財専門調査員 田 鎖 寿 夫
" 佐々木 清 文

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第92集

荒木田Ⅱ遺跡発掘調査報告書

広域農道整備事業岩手地区関連遺跡発掘調査

印刷 昭和60年9月25日

発行 昭和60年9月30日

発行 財団法人 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 岩手県紫波郡南村大字下飯岡11-185

TEL (0196) 38-9001・9002

印刷 株式会社 富士屋印刷所

〒020 岩手県盛岡市下ノ橋町2番9号

TEL (0196) 23-6391
